

郡市医師会だより



「飲水思源」 ～アルメイダ病院50年の歩み～

大分市医師会

植山 茂 宏

市井に珍しい言葉ではありませんが、古来より「井戸の水を飲む時には、井戸を掘った人に思いを馳せるべき」との意味に解釈されます。

本年4月1日をもって大分市医師会立アルメイダ病院は創立50周年を迎えます。半世紀にわたり大分の地で文字通り“地域医療”を実践してまいりました。その証左として創立31年目、1999年（平成11年）には、全国で10番目の地域医療支援病院として県下で初めて認定されました。

“Almeida Memorial Hospital”，これは大分市医師会立アルメイダ病院の国際名称です。

1557年、ポルトガルより来日した始祖Luis. DE. Almeida（ルイス・デ・アルメイダ）は、豊後府内の地に日本で最初の西洋式病院を独力で建設し、さらに、無償で身分の高下を問わず医療を提供したとされています。推測ではありますが、最大2兆円の私財を投じたとの学説があります。しかし、アルメイダが始めた病院は国内外から絶望的な妨害や障害を受け、衰退の一途を辿ってしまいます。

近代のアルメイダ病院は、大分市医師会立病院として1969年（昭和44年）先達である多くの会員の熱意の基に創設されました。運営のノウハウ、組織づくり、前例など全てなく、そのうえ十分な公的助成金もなかったと伺っております。当時の大分市は新産業都市建設の途上にあり、海浜を埋め立てた大工場が林立し、人口も膨張の坂道を急激に駆け上る“騒がしい都市”であったという印象が、小生の頭にもはるかに遠く、しかし鮮明な記憶として残っています。そして医療事情は、人口増加と相まって患者数も急増し、現在の状況からは想像もできない——MRIどころかCTもない——不確定な診断機器・手段で、かつ勤務医師数をはじめとするマンパワー不足の環境で診療を行うという物心共に“苦難の時代”であったと言えられています。

そのような中でも1978年（昭和53年）、創立10年目には、県下で先立って夜間救急医療を開始し、大分県民全体に医療の安寧を広げました。また、一般会員が病院内の医療に参画できる開放型共同利用医療施設も日本では新しい試みでした。その後は、現執行部の体制のもとで2008年（平成20年）に新病院を建築し、現在406床、30診療科（緩和ケアを含む）で日夜診療を行っております。

井戸に例えるならば、医療とは医療者が水を汲み、患者に配り、飲ませると言えます。最初に井戸を掘ろうとした、そして、掘った方々、お名前の列挙しきれない数多くの先哲の艱難は後輩の想像の域を遥かに超えています。しかしその熱誠に思いを馳せますと、私共執行部、病院関係者、職員は思いを尽くし、体を挺して、今あるアルメイダ病院の機能を最大限に発揮し、地域医療に貢献し続けることで初めて、掘っていただいた井戸の水と一緒に飲むことができるのではないのでしょうか。

改めて諸先輩方や関係者の方々に心から感謝申し上げるとともに、先輩方にできたことは我々後輩にもできるはず、と心密かにお願い申し上げます。

郡市医師会だより



宇佐高田医師会病院について

宇佐市医師会

時 枝 正 史

「医師会病院ができてからよくなったよ～。急患はいつでも診てくれるし、手術なんかでも遠くまで送らなくてすむし。」と、父は当時まだ研修医だった私にそのように話していました。宇佐高田医師会病院は宇佐・豊後高田の地域拠点病院として昭和56年にオープンしました。「それ以前は心筋梗塞や脳卒中になってもすぐに遠くの専門病院には行けず、とりあえず自院に入院させて様子を見ていた」というようなケースも結構あったようです。もっともその頃の冠動脈疾患の治療はPTCA（経皮的冠動脈形成術；今ではPCIと言いますが）も普及していない時代で、医師会病院に入院しても今のようにカテーテル検査ができたわけではありませんが。しかし何かあってもすぐ診てもらえる、また高度な医療を地元で受けられるようになったことは、当地域における医療の目覚ましい発展であり、地域住民にとっても大きな安心感につながったことと思います。病院設立は先輩方の多大な尽力のおかげであり、今さらではありますが深く感謝致す次第です。

同病院はその後機能を拡張し、開放型病院として地域医療機関からの紹介を受けながら、二次救急指定医療機関、へき地医療拠点病院、災害拠点病院、第二種感染症指定病院などの指定を受け大変幅広い役割を担っています。110床のDPC対象病院で、昨今の医師不足の煽りを受けながらも大学医局からの応援をいただき、内科（循環器科、消化器科、呼吸器科）と外科を主体に、血液内科、腎臓内科の専門外来も開設し最新の医療を提供しています。とりわけ救急医療は救急車出動の約4割を受け入れており、まさになくてはならない病院であります。また検診センターも併設しており、宇佐市・豊後高田市の検診事業も担っています。

しかしそんな医師会病院も誕生から35年を過ぎて「高齢者」の仲間入りし、「対症療法」ではもたなくなってきました。また一昔前のハコ（建物）では今のスケールには合わなくなってきました。数年前より建て替えの計画が持ち上がっていましたが、昨年度より『宇佐高田医師会病院 経営・施設整備構想検討委員会』（委員長：守山正胤大分大学学長）が開催され、大学や行政、地元有識者など幅広い代表者のコンセンサスを得て、移転・建て替えを求める要望が決議されました。

昭和の終わり～平成の初めというちょっと前のような気がしますが、医療もずいぶん様変わりしました。当時は当たり前であった延命のための人工呼吸器装着はほぼ姿を消し、難治性疾患の病名告知やインフォームドコンセント、セカンドオピニオンなどは普通に行われるようになりました。そして平成の世ももう終わろうとしています。この先医学・医療がどのように移ろいゆくのかなかなか予測が付きませんが、これからの時代に、そしてこの地域の医療ニーズに合った新病院を目指して、本格的に歩を進めているところであります。

郡市医師会だより



ヤーヤドーの掛け声とともに

日田市医師会

大河原 建也

今年も千年あかりに、青森県弘前市の『ねぶた』が参加くださいました。

昨年、北部九州豪雨災害に際して、弘前市医師会『ねぶた』に日田市ゆかりの方がおられ、その有志の方々が慰問として、しかも自費で参加されました。今回は友好元年という意味も込めて日田市が招くという形になったようです。今年の費用は大分県、日田市が費用を負担しての招待となりました。医師会の皆様にも寄付のご協力を頂いた次第です。

『ねぶた』について少し。青森は『ねぶた』、弘前は『ねぶた』と言います。掛け声も違います。青森ねぶたは「ラッセラー」、弘前は「ヤーヤドー」と言う掛け声です。参加した『ねぶた』は弘前市医師会が所有するものでして、医師会が祇園山鉦を持ってる？みたいな。日田に来たのは道幅が狭い事もあり、小型の扇ねぶたと組ねぶたの3台での運行となりました。よくテレビなどで見る大きな組ねぶたもありますが豆田の街には無理なのでこちらは本場で観ていただければと。

医師会関係の『ねぶた』でもあり、事務局長から一緒に参加依頼があり、軽い気持ちで了解と。当日、運行本部にて膳所会長、長野副会長と合流。観光協会や商工会などの方々も集まります。法被や提灯も準備されていて中々お祭りムードで、弘前市医師会の『ねぶた』の責任者である坂本祥一先生にご挨拶と名刺交換などを行っているのと周りにはたくさんの観客が。で、『出陣式！を行います』とのアナウンス。日田市長、弘前市長、屋久島町長（日田市と友好交流都市との事）の挨拶とともに、来賓の方々は出陣にあたり掛け声「ヤーヤドー」の発声練習となりました。医師会会長が呼ばれまして、膳所会長も「ヤーヤドー」と。まあ、次は観光協会の方などと考えていると、突然自分の名前が呼ばれ、慌てての発声に何か変な「ヤーヤドウ」に。もう、後は開き直りです。金魚を先頭に一列目に両市長、町長さんが、二列目に我々医師会の3人が「ヤーヤドー」と叫びながら歩かせていただきました。一時間あまりの参加でしたが、道々見物客の多さに関心の高さを感じつつ、貴重な体験をさせていただきました。弘前『ねぶた』の関係者の方々に感謝をこめて、弘前にねぶたを観に行きたい所ですが、まずは弘前のリングや日本酒（豊盃・六根etc）などを買って、飲んで御礼をと考えております。



郡市医師会だより



和氣あいあい なんでも言える医師会

玖珠郡医師会

野瀬善明

医学専門知識者集団らしい医師会を目指して、医師会員の電子知恵袋を作成中です。今は危機管理の知恵を集めています。火山爆発など自然大災害発生時の24時間以内の初動計画、原因不明の大量類似患者発生時の初動計画等です。困ったときに袋を覗けば仲間の知恵を拝借できるという仕掛けです。25名しかいない小さな医師会ですが、和気合い合い何でも言える活気のある集団です。





豊西症例検討会の歴史を振り返って

竹田市医師会

秦 一 敏

豊西症例検討会は43年前の昭和50年8月21日に豊西胃研究会として発足しました。

初代会長は私の父の秦一之でした。当時のメンバーの井田吉継先生の記録によりますと、会員は大野郡・直入郡・竹田市の医師会員の数名で、毎月10日過ぎの第一木曜日午後6時30分から竹田勤労青少年ホーム、三重町公民館、緒方町国民健康保険病院を会場として開かれ、出席者は少人数ながら熱心な先生ばかりで、休会になったのは昭和57年7月と平成2年7月の大水害の時の2回のみであったとのことでした。

私が本会に初めて出席したのは平成3年5月で、もうすぐ200回を迎えるという頃でした。この時は父と一緒に出席しましたが、第1回から楽しみに毎回出席しておりました父も私にバトンタッチをすると、その後は肺癌の為自宅療養をすることになりました。

その頃の会場は豊後大野市民病院の前身である緒方町国保総合病院の会議室で、今のPC発表とは違ってシャーカステンに胸写や胃透視のフィルムを並べ、内視鏡画像はフィルムをガラス板に挟んでスクリーンに写すという時代でした。当時の会長は井田吉継先生で、緒方町国保総合病院副院長の野田健治先生、内科部長の高倉健先生(現アルメイダ病院副院長)を中心に珍しい症例が沢山発表され、小規模で和やかな雰囲気の中にも白熱したディスカッションが続き、帰りが9時を過ぎることもしばしばありました。思い出に残るのが4月と12月の特別講演会で、特に三重町で行われる会では、日頃出席されない先生も何人か来られ、2次会、3次会が終わってタクシーで都町まで遠征したこともありました。まだバブルで活気に満ちあふれた良き時代でした。豊西症例検討会の全盛期でした。また、300回記念時には大分県医師会より表彰状を戴いております。

私が代表世話人を引き受けるようになったのは平成20年からのlast10yearsでした。

時代の流れか会員の高齢化とともに会も段々と下火になり、出席者も多い時でやっと10人を越える程度で、2～3人しか集まらない時もありました。このままでは500回まで継続することができるだろうかと不安になることもあり、ミニレクチャーを取り入れたりして何とか1時間持たせることに努めました。

本年7月4日に岩城屋ホテルにて「豊西症例検討会500回記念特別講演会」を開催し、約43年間にわたって続いた本会の幕を下ろしました。演者は熊本の高野病院副院長の野崎良一先生と同院内視鏡センター主任の松平美貴子先生にお願いし、当日は昔のメンバーや最近出席されなかった先生にも沢山お集まり頂きました。豊西症例検討会は地域の開業医の質の向上、基幹病院との病診連携の推進、豊後大野市医師会と竹田市医師会の交流において貴重な役割を果たしたと確信しています。最後に会を支えて頂きました両市医師会と関係各位に心から感謝申し上げます。

郡

市

医

師

会

だ

よ

り



豊後大野市医師会だより

豊後大野市医師会

宇野 暢 晃

今年度より豊後大野市医師会の理事になりました宇野暢晃です。

医師会長の岡野良文先生のもと、豊後大野市の地域医療に貢献できるよう日々頑張っています。

現在、豊後大野市の人口は36,077人、高齢化率は41.59%と他の地域と比べても高齢化率が進んだ地域になっています。

人口減少による過疎化も進みつつあり超高齢化した地域の中で、地域の方々が元気で生きがいを見つけ、安心して暮らし続けられるように、豊後大野市とともに協力して、医療を行っています。

今回、表紙の写真には、豊西准看護学院と犬飼湊の写真を載せることにしました。

(1年生21人と一緒に講義の風景と校舎。一番下の写真が大野川の犬飼湊です。)

犬飼湊の話は後にしますが、まずは、豊西准看護学院の事についてお話しします。

豊西准看護学院は、今年度より旧緒方工業高校実習棟を改修した新校舎に移り新たなスタートを切りました。

新校舎は国道502号に面した旧電子機械科実習棟(鉄筋コンクリート2階)延べ床面積は556平方メートルで旧校舎(木造平屋)の約2倍に広がり、教室2室と実習室、図書室が各1室造られた立派な建物です。

本学院は、昭和40年に准看護婦教育過程として開校し、現在、准看護師として必要な看護に関する知識と技術を習得し、地域や社会に貢献できる職業人を育成することを目的とした、豊肥地区唯一の学校です。豊後大野市医師会と竹田市医師会が、ともに協力して運営を行っています。18歳から44歳で入学した1年生21人みんな輝いて勉学に励んでいます。

このような医療スタッフの育成なども地域医療の一貫として大変重要ではないかと感じています。

今、自分が開業しているところは、豊後大野市の犬飼町というところです。

犬飼町の人口は平成30年現在3,616人の町です。犬飼に戻って医院を手伝うようになり、早いもので8年が過ぎました。宇野医院自体は、祖父・父の後を継いで3代目です。

犬飼では、毎年5月5日のこどもの日に大野川でドンコ釣り大会が開催されています。

昨年、大野川でおぼれた子供を助けるために飛び込んで救助したのが私の父です。

飛び込んだ場所は医院のすぐ後ろにある、古い石畳の犬飼湊からです。

この犬飼湊は、1656年(明暦2年)の江戸時代に作られ、竹田の岡藩3代藩主中川久清公が開湊されました。その後、参勤交代で200年以上水上交通の拠点として繁栄しました。今でも当時の繁栄を示す、建物や色々な祭りや歴史物語が残されています。

犬飼の地名の由来は、諸説ありますが、3代藩主中川久清公が鷹狩りの際、病んだ猟犬に手厚くこの地で看護をされたため犬飼場と呼ばれるようになりその後、犬飼町となったとのこと。

不思議な縁のこの土地で、地域の方々や医師会の先生方と協力して行きたいと思っています。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

郡市医師会だより



佐伯市医師会における安否確認システム 「オクレンジャー」の運用の現状

佐伯市医師会

小寺 隆 元

南海トラフ地震が今後30年で70～80%という状況で、また地球の温暖化の影響もあり、徐々に各地で豪雨被害が増加しています。昨年の9月の台風18号豪雨では、番匠川の支流が氾濫し、佐伯市でも冠水が発生し、私は佐伯のコスモタウンという高速の佐伯インターの近くに住んでいるのですが、もう少しで床下浸水という状況でした。しかも雷の影響でブレーカーが落ち、家は停電状態となっており、家の鍵が電気での作動式で、その日は家に入らず、翌日、不動産屋にお願いして、鍵をあけてもらい、家の中に入ることができました。いつ起こってもおかしくない大規模災害に早期に有効な備えをしておく必要があると痛感しました。2016年に島村医師会長が就任されて、早急に取り組むべき問題の1つとして大規模災害時の佐伯市医師会としての対応を挙げられました。これまで佐伯市医師会では、電話での連絡網を作っていましたが、災害時には電話が使用できなくなる状況も多く、災害時でも使えるようなツールで費用も高額ではないことから、オクレンジャーを2017年より導入することになりました。

オクレンジャーに関して、佐伯市医師会の現状を説明させていただきます。オクレンジャーはパスカルという会社がやっている安否確認システムで、メールアドレスや電話番号といった個人情報登録が必要なく、自治体・学校・病院への導入実績が豊富です。私は自分のスマートフォンにオクレンジャーアプリをダウンロードし、登録してもらいました。

システム停止・データ損失を回避してサービスを継続できるようサーバーを国内外の複数箇所に設置しています。大規模災害やその他不測の緊急事態が発生した際、自動または手動で対象の会員に安否確認メッセージを配信する機能があり、佐伯市医師会では震度5弱以上の地震で自動配信とし、水害等の災害時は会長判断によって配信することとしています。現時点での登録は佐伯市医師会理事、災害部会委員、各医療機関、外部7機関(佐伯市、消防本部、南部振興局、警察署、保健所、薬剤師会、歯科医師会)となっています。配信訓練を年3回程度、時間帯を変更しながら、実施予定としております。また、通常のメッセージも送信できるため、オクレンジャーになれることも兼ねて、医師会の理事会等の案内もオクレンジャーを使用しております。

これまでの運用ですが、2017年6月20日発生 of 震度5強の地震の際は導入最中での自動配信でしたので、45%の回答率でした。6月30日に予定訓練では、68%の回答率で、9月18日の台風18号の水害の際は86%で徐々に回答率は上昇していますが、回答のない医療機関には再度配信の徹底をお願いし、100%の回答率を目指しております。

集計した情報は、理事及び災害部会委員と各外部機関で閲覧できるようになっております。

また、掲示板機能があり、全機関で共有できる掲示板を立ち上げることができ、メッセージや

写真のアップ(被害状況や交通状況等)ができます。

本年の8月4日に内閣府主催の南海トラフ地震時医療活動訓練が開催されるのにあわせて、佐伯市医師会ではオクレンジャーを使用した情報収集訓練及び災害拠点病院である南海医療センター、佐伯市、消防本部、保健所も参加し、衛星電話等の会話可能なツールを含めた情報共有訓練を行いました。具体的には「8月3日11時頃、地震がありました。震源地は日向灘。地震の規模はマグニチュード7.0と推定されます。各地の震度は次の通りです。震度7 佐伯市 この地震に伴い安否確認を実施いたしますので、下記の質問にご回答ください。また、掲示板もアップしますのでそちらにも被害状況等の投稿をお願いいたします。」という文章を添えて、診療の可否、人的被害(医師)、人的被害(職員・家族)、医療施設の被害状況、ライフライン(水道)、ライフライン(電気)、救護所出務(医師)、救護所出務(看護師)、救護所出務(事務・その他)に関するチェック式の質問および文章返信もできる形での配信を8月3日11時に行いました。

今後は複数の通信手段を確保しておくという観点からLINEなどの利用も検討しております。

大規模災害時に地域医療を守っていくために佐伯市医師会として貢献できるように今後も前進していければと思っております。



郡市医師会だより



大分東医師会だより

大分東医師会

若林 礼 浩

私は、元々、佐賀関町で生まれ、大分市東部の坂ノ市で育ち、坂ノ市中学校から大分舞鶴高校をへて大分医科大学(現大分大学医学部)に進学しました。大分医科大学9期生の卒業生で、大分大学病院をはじめとし、県内の脳神経外科病院を転勤し、平成27年5月に地元坂ノ市で開業しました。大分東医師会に入会して3年になり、この5月で4年目を迎えました。

大分東医師会は、大分大学の卒業生が多く、比較的年齢も近く、良い雰囲気の中で連携がとれていると思います。近くに大分医療センターがあり、入院症例も快く引き受けてくれ、病診連携がスムーズに行われていると思います。

また、月1回の勉強会（大分東研究会、大分東臨床懇話会）もあり、日々の臨床に役立っています。

脳神経外科の病院勤務医時代は、救急対応が主で、脳梗塞、脳出血、くも膜下出血など救急搬送された患者さんを、限られた時間内で検査、処置、手術し、術後管理を行い、さらに当直業務をこなし、へとへとになっていました。それはそれでやりがいがあったのですが、忙しい中、ずっとこのままでいいのかなと疑問に思うようになりました。患者さんの話をもっとゆっくり聞いたり、病院で患者さんを待っているだけでなく、外へ出て行って早く治療ができないかと思うようになり、思い切って開業してみました。その結果、勤務医の時にはできなかった、やりたかった3つのことができるようになりました。

1つは、積極的に外へ出てゆき、訪問診療や往診によって通院困難な方に対し、早期診断、治療を行うことができるようになりました。一人暮らしの方も多くなり、認知症やめまい症の方は病院に行けなかったり、行きたがらない方も多くいます。御家族とともに地域の方々と協力して診療にあたっています。

2つ目は、外来でゆっくり時間をとって、患者さんからじっくり話を聞くことができるようになりました。ゆっくり話を伺うことで、家族背景や疾患の背景が見えてきて、正確な診断につながっています。

3つ目は、大分東警察署と協力して、死体検案に積極的に立ち合い、死因究明のために役立つことができるようになりました。積極的にAutopsy Imaging (Ai) も行っています。昨年（平成29年）は検案100例を超え、Aiも80例行いました。

小さな診療所では、病院に比べすぐに検査ができなかったり、必要な医療器具、医療材料が手元になかったりなど、不自由な面がありますが、その代わり、小回りが利いて、自分の判断で自由に動ける面もあります。

今後も地域の方々と医師会の先生方と協力して、地域医療に貢献したいと思っています。今後ともよろしくお願い申し上げます。

郡市医師会だより



僕の好きな先生

大分郡市医師会

分 藤 準 一

私は、昭和37年、大分赤十字病院で誕生しました。お袋にきくと、当時日赤が最も安く産めたからだそうです。12/18ですが、割に早く退院の指示があり、クリスマスのキャンドルサービスを見ることができなかった、とよく話してくれました。

幼少期のかかりつけ医は、萩原「石田医院」でした。待合室には、検便の標本が壁にあり、よく眺めていたことを覚えています。石田修先生だったかなあ、ベル型の聴診器をお持ちで、口内の診察にはテーブルの白熱球スタンドをつけて、額帯鏡で診てくれました。「お茶の水博士」のようなイメージを持っていたかも。大きくなるにつれて、診察室に「石田修詩集」みたいな本を見いだし、詩を詠まれるんだと思ったこともありました。寒い日は薬剤師の奥様が「ストーブで暖まりなさいね」と優しく声を掛けてくれました。眼科は、大坪眼科（府内町）に通院しましたが、その後、空港通りの「古城眼科」がかかりつけに。米田さんという同級生のお母さんが勤務されており、彼女はそれを誇りに思ってたように感じたものです。その後、カメラなどの光学器械が好きになったのも、眼科さんの影響があったんだ、と感謝ですね。

幼稚園生の頃、花津留バス停裏手にあった、「ハゼノキ」にまけて、全身発疹を生じました。「三浦小児科」舞鶴橋のたもとにあり、三浦剛先生だったと思いますが、毎日静脈注射に通い、発疹部位に軟膏を塗って快復しました。鉄腕アトムの子葉袋が、とても好きでした。その後、大分放送横に移転した医院にもかかりました。頭痛を度々訴える子どもで、4年生のときだったか、「一度脳波をとってみようか」と言われ、もう俺だめかな、と震えあがったこともありました。中津留プラスストア前のR197交差点で、自動車にはねられたこともあります。今村病院に連れて行かれ、診察。おなかにマジックで「へのへのもへじ」と書かれていたそうで、先生の失笑をかい、恥ずかしかったと、母に聞かされたことも懐かしい思い出です。

その後、大分医科大学の耳鼻咽喉科に就職し、平成元年、宮崎部長の退職を機に、大分赤十字病院医師として赴任しました。自分の産まれた病院に勤務するということで、大層な喜びを感じました。産婦人科の、奥野先生や植木先生と出会い、どちらかの先生が俺を取り上げて下さったのかな？なんて思いを馳せました。巡り巡って自身のスタート地点に戻ることができ、また、同じフロアの織部元廣先生をはじめとした、内科の先生方にも研修指導をいただき、自分の医療活動の原点のような思いを持ち続けております。

いままでの人生の中で、かかりつけ医の大切さを身を以て体験してきたことは、間違いありません。大分郡市医師会では本年より、地域社会と共に創生する、「地域コーディネート事業」が開始されます。次の世代を受け継ぐ子ども達にも、思い出に残るような医療を、会員の総意で実現していきたいと思います。

郡市医師会だより



フリーアクセス

速見郡杵築市医師会

佐藤 素生

速見郡杵築市医師会の地域の高齢化率は杵築市が35.4%、日出町が29.3%と、それぞれ全国平均の25年先、5年先を走っているようです。今年の4月に医療と介護の報酬改正が行われましたが、近未来の高齢化を見すえて盛んに地域包括システムの構築が叫ばれております。厚生労働省のホームページにも『住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を実現していきます。』とあります。

ところで、この地域包括システムを進める上で、医療のフリーアクセスが相容れない問題を起こすことを経験した方も多いのではないかと思います。高齢者の特徴として、慢性疾患、複数の病気、認知症等、また救急的なことも多く起こることがあげられます。そしてこれらの特徴を有する高齢者にはかかりつけ医や家庭医の制度が適合しやすいのもわかります。しかし、フリーアクセスがあるため患者さんの家族は自分達の都合の良い地域外の病院、時には県外の病院を受診させることがよくあります。また、多くの病気があると極端な場合、病気の数だけの異なる専門家にかかることもあります。この場合、病気ではなく総合的に病人の状態を把握している医師がいないため、状態が悪化したり、救急時には困ることがしばしば起こります。

近所に旧知の高齢者がおり、たまに診察しておりました。この人は生活習慣病等が複数ありましたが、比較的安定しておりました。ありがたくも私を主治医、あるいはかかりつけ医と呼んでくれておりましたが、日頃安定している時にはどの病気も地域外の大きな拠点病院にかかっておりました。ところが、調子の悪い時や急変時には小さな医院である当院にかかります。主治医あるいはかかりつけ医というのは急な時に待たずにすぐ診てくれる医師のことと思っているようでした。当院では日頃どういう状態なのか分からないのですが、急いで診てもらいたい時は私を主治医と呼び当院にかかるのです。拠点病院は体調の良い時に定期的にかかっておく病院で、具合の悪い時は遠くて長く待たされる拠点病院にはかかれないということらしいです。逆ではないかと何度も説明しましたが理解してもらえませんでした。結局この人は悪化した持病に本人が気付かず、救急車で遠くの拠点病院に入院し、退院できずに数ヶ月後亡くなりました。これが、本人、家族、医療や介護の関係者さらに周りの社会が望む方法であったのでしょうか。

物事を選択には個人の意思がもっとも重視されるといわれますが、専門知識が必要な場合個人が決定するには困難なことがあります。患者さん個人が適切に自分の病気を判断しその専門家に容易に辿り着けるでしょうか。医師でも適切な高次医療機関を選択するのが困難な場合があります。フリーアクセスで生じるドクターショッピング、ポリファーマシー等どれも否定的に用いられることの多い用語です。フリーアクセスは個人の決定権を重視し、満足させるシステムに思えますが、社会全体としては無駄の多いシステムにもなりかねません。

厚生労働省は『地域包括ケアシステムは、保険者である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性に応じて作り上げていく必要があります。』と主張しています。果たしてフリーアクセスと地域包括ケアシステムは共存できるのでしょうか。



郡市医師会だより



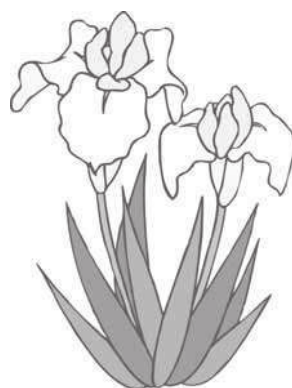
国東だより

国東市医師会

帯刀真也

国東市医師会は国東市と姫島村からなり、現在A会員18名、B会員17名、老会員2名の37名です。病院が3施設、有床診療所が6施設、無床診療所が11施設あります。5月に役員改選が行われる予定です。小さい医師会ですが、地域の方々が安心して暮らすことができるように、しっかり連携し協力していきたいと思います。

話は変わりますが、六郷満山という言葉聞いたことがあると思います。六郷満山とは国東半島一帯にある寺院群の総称で、その神仏習合の文化は今日まで受け継がれています。六郷は両子山を中心とした山稜の間に開かれた6つの郷を指し、満山はそこに築かれた寺院群を意味しています。六郷満山文化と呼ばれる独特の仏教文化が栄え、今年は六郷満山開山1300年という節目の年です。今もその遺跡や寺院が至る所に散在しており、お祭りなどの祭事も引き継がれています。今年は六郷満山開山1300年ということで情報発信も活発に行われています。この機会に、ぜひ国東半島を訪れて六郷満山文化を感じてみてください。



郡市医師会だより



大切にしたい～3つの感謝～

豊後高田市医師会

永松 秀 康

みなさん、こんにちは。昨年10月に豊後高田市で開業した永松です。よろしくお願いいたします。
開業までに数多くの不安や疑問があり、先輩開業医の先生方よりいろいろな助言や経験談を聞くことができました。中でも、皆さん口をそろえて嘆いていた？のはスタッフの労務問題でした。「スタッフに陰のリーダーができると怖いよ！？」とか、「突然ですが、私たちやめさせていただきまます。」といわれて本当に困った、等々経験談はとても参考になりました。当然、私も不安に思いながら開業スタートでしたが、幸いなことに、地域医療に対する熱い思いの元、思いやりのあるスタッフに囲まれて、感謝の気持ちでいっぱいの毎日です。スタッフの誕生日には、バースデーケーキでお祝いをするようにしています。

私が小児科標榜を決意し、別府市の松本小児科（院長：松本重孝先生）の外来陪席で数多くの経験を積まさせていただきました。教科書には載っていない実臨床での助言や現代の小児科情報など多岐にわたり、私一人では何年もかかるであろう数多くの知識を松本院長先生より恵んいただきました。また、開業直前には、スタッフ教育としてワクチン接種や外来での看護指導などをお願いし、懇切丁寧にご指導をいただきました。これからも松本先生の診療姿勢をお手本に精進していきたいと思います。誠にありがとうございました。

さて、最後に親への感謝です。父親は健在ですが、母親は平成18年に亡くなっています。両親ともに教職員として豊後高田市内の学校勤務が長かったせいか、外来患者さんで両親を知る方や担任として子供を受け持たされた親御さんが来院されたりしています。中には、「小学校の時に担任だった永松先生の息子さんらしいよ。受診してみたら？」と娘に言われてきました、という方もおられました。今、目の前にあるご恩に感謝することは当たり前ですが、今はなく、遠く離れた存在であった母親が開業間もない不安な毎日の私を支えてくれているんだなあとありがたく感じました。

毎日が一期一会だなと思います。出来ることは小さいですが、真摯な態度で息の長い診療を地元で続けていきたいと思っています。これからもよろしくお願いいたします。